

## 飯舘村スタディツアー参加レポート

フェリス女学院大学音楽研究科 1年 YM

私が飯舘村という土地名を耳にすることになったのはこの春からのことであった。それまで私は飯舘村が福島県にあることも、原発事故による放射能汚染の影響で全村避難になっていることも知らない状態であった。もしかしたらニュースの中で名前を聞いたことがあったかもしれないが、私にとって福島県も飯舘村もとくに縁の深い場所ではなかった。東北地方に行ったのも今回のスタディツアーが初めてであつたくらいである。そんなフェリスの一音楽院生であつた私であるが蝉が鳴く頃までに飯舘村についての情報を十分すぎるほど持つことになったのは、それを私に伝えよう、知らせようといった活動を行っていた方々のおかげである。今回スタディツアーにお誘いくださった高雄先生は勿論のこと前回のスタディツアーに参加された方々の発信しようとする活動を通して、私は少しずつではあるがその場所に興味を持った。勿論、全村避難という四字熟語の持つインパクトは大きい。原発事故や放射能など2011年以来私達が過敏になった、いや、ならざるをえなかったキーワードも沢山散らばつたスタディツアーではあつた。しかし、私は飯舘村という場所にマイナスな印象よりも、むしろプラスの印象を抱いていた。放射能の数値や汚染問題といった話題よりも飯舘村で行われている再生、復興への取り組みや活動の内容を聞く機会が多かつたからであろう。そうした取り組みを率先して行っている方々はいったいどういった思いを抱いていらっしゃるのか、どういった方々なのか、自然と興味が湧き今回のスタディツアーへの参加を決めた。実際に自分の目で見て、耳で聞いてみようと思つたのである。そしてこのスタディツアーを通して私も、私をスタディツアーへと誘ってくれた物事を発信しようとする活動に何らかの形で関わることが出来ればと考へたわけである。

飯舘村ではさまざまな方々のお話を聞く機会に恵まれた。そこで活動している方々は皆真剣であり、親切であり、懸命であつた。懸命に私達にさまざまなことを伝えようとしてくれた。震災以降の動きや国、行政に対しての不信感、見えない放射能とどう向き合っていくかなどを含め現地での取り組みや何を指しての活動なのかということについての説明だけではない。もっと深い人間としての在り方や、これからの時代をどう生きていくべきかという貴重なお話も各所に交えた内容の深いお話であつた。私は正直そのすべてを受け止めきれたかはわからない。実際に飯舘村に赴き畑の上に積み上げられた大量のフレコンバックを目の当たりにしてしまった。苔の上で放射能の測定器が高い数値を表すのを見てしまった。山砂が撒かれた畑や、人の住んでいない人家が問題の大きさを物語っていた。頭ではわかっていたことであつたが、実際に目にするのと人から聞くのでは違ふ。自立して再生することを目指そうとする思いの強さは確かに伝わつたがそこにはまださまざまな障害があるように私には思へたが、そんなことは百も承知なのであろう。そこで活動する人々の瞳には強い意志が窺へた。とくに菅野さんの言葉だ。言葉の一つ一つがしっかりと胸に響くような話し方をされる方だつた。実際私などの想像を遥かに越す苦難を乗り越えてきたのだろう。マイナスからの出発であると口にしながら

も、これからの村の在り方について問題点を含めしっかりと見据えた上で何より理解し合う事の大切さを説かれているのが印象的であった。放射能は人の関係をも壊す。見えないからこそ、そこにはびこる不安は募り疑惑や不信が生まれる。それでも帰村に向けて村に戻る人も戻らない人も村について考え、強制はせず少しずつ村のこれからについて理解して貰うことが大切であるという。こうしたすべてを受け止める器の上に飯館の再生、復興へのレールは敷かれているのである。

また菅野さんはこれからの時代を生きる私達に物の在り方について常に問い続けることの大切さを伝えて下さった。今の時代に当たり前のように使われている物は、本当にすべて必要なものであるのか。それを見極めることの大切さ、である。例えばエネルギーの在り方である。人の命、そして生きがいに関わるエネルギーである。原子力発電というエネルギーが本当に必要なものであるのか。今回の原発事故をきっかけに考えていくべきであるとお話があった。確かに私達の生きる時代にはさまざまなものが溢れている。それが本当に必要かどうかなどと考える間もなくそれらを享受し、わけもわからず当たり前となっている。私の心に強く残った言葉であった。また事故を事故として終わらせるのではなく、次に繋げるきっかけとして捉えるその強さに感動した。

そういった気持ちの強さを私は飯館電力の小林さん、千葉さんのお話の中にも感じた。今生きていなければこの経験は出来ないと語り事業とは何かというお話から、これから自分たちが行うことについて真っ直ぐな目で真剣にお話下さった。小林さんの、今しかできないことをやるのは不安だけれど楽しい、という言葉と共にその時伺ったお話が印象的であった。農業を長くやって来た人々は自然を相手に同じことを繰り返してきた。だから強いのだという。私はその時確かに、なるほどなと思った。だけれどそれはわかったつもりでいるだけなのだろう。それだけではないのだ、と今の私は思う。生まれ育った村を再生へと導こうとする強さがそんな簡単に説明出来るわけがない。理解するものでもないのだろう。強く感じるものだ。そしてその気持ちが人を動かす。感動とは、感じて動くと書く。

今回のスタディツアーで感じたものが私たちを動かし、そしてまた新たな人々を動かしていくのではないだろうか。

飯館村から帰ってきてから一週間私は何度もノートを開き、書き留めたさまざまな言葉を読み返している。飯館村からの帰りの車の中で私達は今回見て聞いて学んできたことをそれぞれ発信することを強く胸に誓った。今回のスタディツアーをきっかけにこれからも飯館村に関わり、その活動を知り、その意思を受け取り、より多くの人に伝え発信していこうと強く思った。